

Title	曖昧さへの態度とパラノイア
Author(s)	津田, 恭充
Citation	対人社会心理学研究. 15 p.71-p.76
Issue Date	2015
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/54432">https://doi.org/10.18910/54432</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 曖昧さへの態度とパラノイア

津田恭充(愛知学泉大学家政学部)

これまでの研究で、曖昧さに対する非耐性がパラノイアの素因であることが示唆されている。曖昧さに対する態度には、従来から議論されているネガティブな態度以外にポジティブな態度も存在するが、後者についてはパラノイアとの関連がまだ明らかでない。そこで本研究では、大学生 197 名を対象に、曖昧さに対するいかなる態度がパラノイアの素因となりうるのかについて検討を行った。パラノイアの指標として、青年期によくみられるパラノイア的な自己関係づけを測定し、曖昧さへの態度を「曖昧さの享受」、「曖昧さの受容」、「曖昧さへの不安」、「曖昧さの統制」、「曖昧さの排除」の 5 つの側面から測定した。構造方程式モデリングの結果、曖昧な事態に対して不安を覚える「曖昧さへの不安」や、情報収集などによって曖昧さを統制しようとする「曖昧さの統制」がパラノイアと関連していることがわかった。これは、曖昧さに対するネガティブな態度がパラノイアの素因であるという先行研究と一致する結果であった。

キーワード：妄想、関係念慮、自己関係づけ、曖昧さへの態度、曖昧さへの非耐性

## 問題

数多い精神症状の中でも、パラノイアは対人的な性質の強い症状のひとつである<sup>3)</sup>。そのメカニズムについてはさまざまな側面から研究が行われているが、推論バイアスに関する研究(e.g., Huq, Garety, & Hemsley, 1988)から派生して、完結欲求がパラノイアに関連していることが明らかにされている(Bentall & Swarbrick 2003)。完結欲求は、「無秩序や曖昧さではなく、確固とした答えを求めること」と定義され(Kruglanski, 1989, p.14)、これを測定する NFCS(The Need for Closure Scale; Kruglanski, Webster, & Klem, 1993; Webster & Kruglanski, 1994)は、「秩序に対する欲求」、「曖昧さへの非耐性」、「決断性」、「予測可能性に対する欲求」、「偏狭さ」の 5 つの下位尺度で構成されており、Bentall & Swarbrick(2003)では、「曖昧さへの非耐性」がパラノイアと関連することが示されている。Budner(1962)によれば、曖昧さとは、十分な手がかりがないために適切に構造化や分類化ができない状態を指す。そして、曖昧さへの非耐性とは、曖昧な状況を脅威の源泉や望ましくないものとして知覚する傾向のことをいう。パラノイアの強い者は、曖昧な状況を恐れるがゆえに、そうした状況に直面した際に十分な手がかりがないままに判断を行い、それがパラノイアへとつながっている可能性が考えられる。

パラノイアと密接な関連のある、妄想に関する理論を、曖昧さへの対処という観点からとらえ直し、Bentall & Swarbrick(2003)の研究と結びつけることもできる。Maher(1974)は、何らかの非日常的な知覚的異常(最も多いのは聴覚障害)がはじめに生じ、それを説明するために妄想が形成されるのだと主張した。例えば、何らかの原因によって聴覚に異常が生じ、今まで体験したことのなかったような音や声のようなもの

のを知覚したとする。このとき、この音や声の正体について曖昧さが生じているといえる。妄想者はこの曖昧さをそのままにしておくことができず、テレパシーで誰かに話しかけられたというような解釈してしまうというわけである。Buchanan, Reed, Wessely, Garety, Taylor, Grubin, & Dunn(1993)によると、統合失調症患者の 53%、妄想性障害患者の 28%が妄想の発生前に異常な知覚体験があったことを報告しているが、これは Maher(1974)の主張を間接的に支持するものといえるだろう。

より直接的に、健常者を対象にして聴覚障害を実験的に作り出し、実際にパラノイアが生じるかどうかを調べた研究もある。Zimbardo, Andersen, & Kabat(1981)は、催眠によって聴覚障害を引き起こされ、後催眠健忘によってそのことを自覚できなかった群(実験群)、聴覚障害を引き起こされたがその理由は知っていた群(統制群 A)、聴覚障害とはまったく無関係の暗示をされた群(統制群 B)を設けた。そして、さまざまに解釈できる曖昧な状況を作りだし、質問紙や行動観察によって実験参加者のパラノイアを測定した。その結果、仮説どおり、実験群は統制群よりも強いパラノイアを生じていた。

Maher(1974)と似た考え方として、津田(2009)は、曖昧さの低減努力という観点からパラノイアを説明している。それによれば、曖昧な対人状況が生じると、人はその曖昧さを解消するための情報収集を動機づけられる。その曖昧さを生みだしている他者との直接的コミュニケーションが十分にできれば曖昧さは低減されるが、コミュニケーションスキルなどの社会的スキルの不足のために他者から十分な情報収集ができないと、他者のささいな言動などを繰り返し考えることで曖昧さを解消しようとする。その副産物としてパラノ

イアが生じるという。曖昧さを低減するための情報収集行動には、直接的コミュニケーション以外の方法も存在するが、すべての情報収集行動が曖昧さの低減につながるとは限らない。津田(2011a)は、知人からの又聞きやインターネットを通じて調べるなどの間接的な情報収集行動はパラノイアを高めることにつながることを明らかにしている。これは、間接的に得られた情報はその不確かさゆえに、曖昧さを低減するのではなく更なる曖昧さを生みだしてしまうためであるとされている。

以上のように、先行研究では、個人特性としての曖昧さへの非耐性や、曖昧さをもたらす状況がパラノイアにとって重要な働きをしていることが示唆されている。本研究では、特に前者の個人特性としての曖昧さへの非耐性に焦点を当て、これをさらに詳しく検討することを目的とする。その理由は、近年、曖昧さへの態度の多次元性が指摘されているためである。前述の NFCS を含め、既存の尺度は、曖昧さ是不快なものであるという前提に立っており、曖昧さに対して不安を感じるとか、曖昧さに耐えられないなどのネガティブな態度を測定するものがほとんどである。しかし実際には、曖昧さを楽しむなどのポジティブな態度も存在する。このことを踏まえて、西村(2007)は、曖昧さに対するネガティブな態度だけでなく、ポジティブな態度も整理し、それらに対して探索的因子分析を実施した。その結果、「曖昧さの享受」、「曖昧さの受容」、「曖昧さへの不安」、「曖昧さの統制」、「曖昧さの排除」の 5 因子が見出された。前 2 者は曖昧な事態に対するポジティブな態度を表すが、これはネガティブな態度を単に逆転させただけのものではなく、独立した概念であることが示唆されている。

先行研究では、曖昧さへのネガティブな態度とパラノイアとの関連は明らかにされているが、曖昧さへのポジティブな態度との関連については明らかにされていない。もしも津田(2009; 2011a)の主張するように、曖昧さを嫌い、それを低減しようとするのがパラノイアの生起に関与しているならば、曖昧さへのポジティブな態度ではなく、曖昧さへのネガティブな態度がパラノイアと特異的に関連すると考えられる。曖昧さへの態度とパラノイアとの関連を明確にすれば、その知見を臨床的介入や、非臨床群への啓発などに応用できる可能性がある。

## 方法

### 調査対象者

A 大学の学生 53 名および B 大学の学生 147 名の計 200 名を調査対象とした。このうち 3 名に回答の不備

がみられたため、これを除いた 197 名(男性 62 名、女性 135 名)の回答を分析対象とした。平均年齢は 19.55 歳( $SD=.72$ )であった。

### 調査手続き

心理学の講義時間の一部を使用して調査を行った。調査は無記名式で行い、回答結果が成績に影響することはないこと、調査への回答は任意であり強制ではないこと、調査実施後に全体の平均値などの結果を公開することを口頭および文面にて説明した。調査用紙回収後に研究の目的を説明し、後日、平均値やおおまかな分析結果をフィードバックした。

### 調査内容

**曖昧さへの態度尺度** 西村(2007)が開発した、曖昧さへのネガティブな態度およびポジティブな態度を測定する尺度である。曖昧さに対して不安などの情緒的混乱と、それに伴う対処の難しさを感じる傾向を表す「曖昧さへの不安」曖昧な状況を否定的に評価し、情報収集などによって知的に曖昧さを把握・対処しようとする傾向を表す「曖昧さの統制」、曖昧さを認めず、白黒はっきりさせようとする傾向を表す「曖昧さの排除」、曖昧さを魅力的なものと評定し、そこに楽しみを見出す傾向である「曖昧さの享受」、曖昧さをそのまま認めて受け入れることのできる傾向である「曖昧さの受容」という 5 つの下位尺度が含まれ、全 26 項目で構成されている。調査対象者には、それぞれの項目に対して「1.まったくあてはまらない」、「2.ほとんどあてはまらない」、「3.あまりあてはまらない」、「4.少しあてはまる」、「5.かなりあてはまる」、「6.非常にあてはまる」の 6 件法で回答を求めた。

**改訂版自己関係づけ尺度** 本研究は非臨床群の大学生を調査対象としている。そこで、一般の青年にも日常的にみられるパラノイアを測定するために、金子(2000)の改訂版自己関係づけ尺度を用いた。これは、非臨床群を対象とした研究で頻繁に用いられている Fenigstien & Venable(1992)のパラノイア尺度を元に作成されたもので、日常生活におけるパラノイアを測定する。具体的な内容は「周囲の笑い声が、自分を笑っているように思えるときがある」、「隣に座っている人が他の席へ移動すると、自分を避けたのではないかと思うことがある」など 12 項目である。調査対象者には、それぞれの項目に対して「1.あてはまらない」、「2.あまりあてはまらない」、「3.どちらともいえない」、「4.ややあてはまる」、「5.あてはまる」の 5 件法で回答を求めた。

なお、記憶研究などにおいて自己関連づけ(Rogers, Kuiper, & Kirker, 1977; 堀内, 1995)と呼ばれる現象が存在するが、金子(2000)の改訂版自己関係づけ尺度

における自己関係づけとは無関係である。

## 結果

### 尺度の因子構造の確認

改訂版自己関係づけ尺度については繰り返し因子的妥当性が確認されているが(金子, 2000; 津田, 2009)、曖昧さへの態度尺度については開発者の西村(2007)以外には因子的妥当性の確認がなされていない。そこで、構造方程式モデリングによる検証的因子分析を実施し、改めて尺度の因子構造を確かめることにした。はじめに、原尺度にならって、「曖昧さの享受」、「曖昧さへの不安」、「曖昧さの受容」、「曖昧さの統制」、「曖昧さの排除」の5因子斜交モデルを構成し、適合度を算出した。次に、理論的に考えられる他のモデルについても適合度を算出し、この5因子斜交モデルとの比較を行った。比較対象としたモデルは、「曖昧さの享受」と「曖昧さの受容」に含まれる項目をまとめて「曖昧さへのポジティブな態度」という因子を想定し、「曖昧さへの不安」、「曖昧さの統制」、「曖昧さの排除」に含まれる項目をまとめて「曖昧さへのネガティブな態度」という因子を想定した2因子斜交モデルと、尺度全体が1因子構造であると仮定した1因子モデルであった。

分析の結果、原尺度どおりの5因子斜交モデルが他のモデルよりも明らかによい適合を示した(Table 1)。この5因子斜交モデルを元にして最適なモデルを探索したところ、「いろんな可能性がある」と、選ぶのに時間がかかってしまう(曖昧さへの不安)」「情報が多すぎると、かえって頭が混乱してしまう(曖昧さへの不安)」「一貫していないことには信頼がおけない(曖昧さの統制)」の各項目を除いた場合に最もよい適合度が得られた。項目内容としても、これらの項目は因子名から想定される項目内容からは若干ずれているように思われるため、これらの項目を除外したモデルを最終的に採択した。全体的に GFI や AGFI の値が低い、これは、今回検討したモデルでは観測変数が比較的多く、

自由度が高いためだと考えられる。豊田(2002)によると、このような場合には1自由度あたりの適合度指標(CFI や RMSEA など)を参考にするのが良い。このモデルでは CFI = .87, RMSEA = .08 で、許容できる値であった。

### 各尺度の記述統計量と尺度間相関

各尺度の尺度得点の平均値と標準偏差、および内的整合性を示す Chronbach の  $\alpha$  係数を算出した。また、各尺度間の単相関係数(Pearson の積率相関係数)を求めた。これらの結果は Table 2 にまとめられている。曖昧さへの態度尺度の各下位尺度間の相関関係は、おおむね西村(2007)と同様であった。また、いずれの下位尺度も適度な内的整合性をもっていた。パラノイアとは、「曖昧さへの不安」と「曖昧さの統制」が有意な正の相関を示した。

### 曖昧さへの態度とパラノイアの関連

前述のとおり、単相関分析では、「曖昧さへの不安」および「曖昧さの統制」がパラノイアとの間に有意な正の相関を示した。ただし、曖昧さへの態度尺度の各下位尺度間には相関関係があるため、これらの影響を互いに統制した上でパラノイアとの関連をみる必要がある。そこで、曖昧さへの態度のどの側面が特異的にパラノイアに影響しうのかを構造方程式モデリングによって検討した。先行研究の知見に基づき、曖昧さへの態度がパラノイアの素因になりうると仮定し、曖昧さへの態度からパラノイアへのパスを設けた。また、それぞれの曖昧さへの態度には因子間相関を想定した。以上のモデルについて分析を実施し、有意でなかったパスを除外しながら分析を繰り返したところ、Figure1 のモデルが得られた。パラノイアに対するパスが有意であったのは、「曖昧さへの不安」および「曖昧さの統制」の2つで、結果的には単相関分析の場合と同様の傾向がみられた。モデルの適合度は GFI = .79, AGFI = .76, CFI = .89, RMSEA = .06 であった。GFI や AGFI の値が低い、これは前述したように、

Table 1 曖昧さへの態度尺度の検証的因子分析

	GFI	AGFI	CFI	RMSEA	AIC
1因子モデル	.49	.41	.36	.16	1486.39
2因子斜交モデル	.58	.51	.52	.14	1219.77
5因子斜交モデル	.75	.70	.78	.09	784.25
最終モデル	.82	.78	.87	.08	—

注) 最終モデルは他のモデルと項目数が異なるのでAICは算出していない。

Table 2 各尺度間の単相関係数

	平均値	標準偏差	$\alpha$ 係数	①	②	③	④	⑤
①曖昧さへの不安	15.92	3.50	.88	—				
②曖昧さの統制	16.78	3.31	.84	.37**	—			
③曖昧さの排除	11.31	3.05	.85	.08	.21*	—		
④曖昧さの享受	29.02	5.23	.87	.04	.41**	.33**	—	
⑤曖昧さの受容	18.76	4.22	.87	-.03	.21*	-.15	.43**	—
⑥パラノイア	31.80	9.46	.86	.36**	.29**	.06	.09	-.08

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

観測変数の多さとそれによる自由度の高さが影響しているためであると考えられる。1 自由度あたりの適合度指標を見ると十分な適合が示された。

### 考察

本研究では、曖昧さへのネガティブな態度だけでなく、今まで検討されてこなかった、曖昧さへのポジティブな態度についてもパラノイアとの関連を調査した。その結果、曖昧さへのポジティブな態度はパラノイアとは関連がないことが明らかになった。一方、曖昧さへのネガティブな態度はパラノイアとの関連が認められた。これは先行研究(Bentall & Swarbrick, 2003)と類似した結果で、曖昧さへのネガティブな態度がパラノイアの素因となりうることを示唆する。具体的には、高い「曖昧さへの不安」と「曖昧さの統制」がパラノ

イアと有意な関連を示した。「曖昧さの統制」は、情報収集などによって曖昧さを統制する傾向のことであるが、これは、曖昧な事態に直面した際の情報収集がパラノイアにとって重要な役割を果たしていることを意味しており、津田(2009; 2011a)の知見と整合する。臨床的介入を考える際、こうした曖昧さへの態度へのアプローチを行うことが有効な可能性がある。

ところで、強迫に関する Salzman(1968)の臨床的観察も示唆的である。それによると、強迫とは、自分自身や周囲の世界に知的統制を加えることによって、不確実な世界に見せかけの安定をもたらそうとする方法である。言い換えれば、強迫は曖昧さを統制するための方法であるという。このことを踏まえて、西村(2007)は曖昧さへの態度と強迫との関連を調べている。その結果、強迫と「曖昧さの統制」および「曖昧さへの不

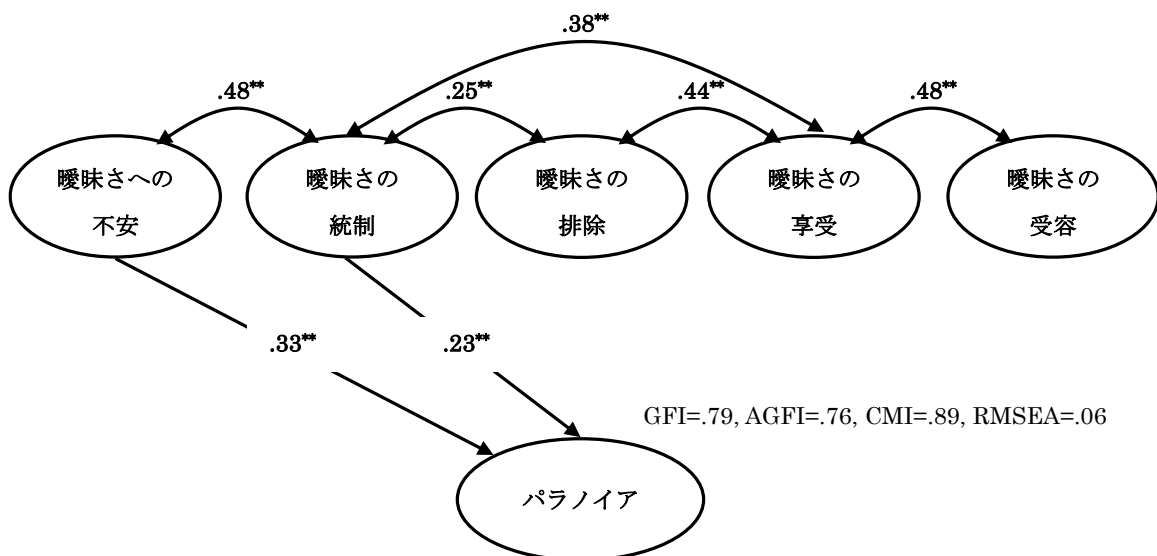


Figure 1 曖昧さへの態度とパラノイア

注) \*\* $p < .01$ . パス係数は標準化係数。見やすさのために観測変数と誤差変数は省略した。

安」との間に正の相関がみられ、Salzman(1968)の主張が支持された。本研究でも「曖昧さの統制」と「曖昧さへの不安」がパラノイアと関連していたが、このことは、パラノイアと強迫は共通の特徴や心理学的に共通の生起メカニズムを有しているかもしれないことを示唆している。そもそも、パラノイアは、自分以外の人と共有されにくい思考・信念であるという点では類似している。両者を区別する最大の特徴は自我違和性と、強迫観念には「ばかばかしい考えだと自覚している」という自我違和感があるとされるが、実際には自我違和感の乏しい強迫観念も存在する(Kozak & Foa, 1994)。そのため、パラノイアなのか強迫観念なのか区別するのが難しいことも多い。こうした類似した現象を鑑別するための研究を行う必要があるが、それとは反対に、両者を「曖昧さへの不安とその統制欲求」という心理的基盤を共有した症状群としてまとめとらえる試みも有益かもしれない。

本研究にはいくつかの課題もある。本研究におけるパラノイアはネガティブ感情を伴うものであるが、そのネガティブな内容がゆえに、曖昧さへのネガティブな態度と有意な関連を示しただけであるという可能性が考えられる。もしそうであれば、曖昧さを低減しようとしてパラノイアを生じるという理屈は成立しないことになる。津田(2011b)は、ネガティブ感情を伴う自己関係づけ(パラノイア)とは反対に、ポジティブ感情を伴う自己関係づけを測定する尺度を開発している。今後、この尺度を用いて本研究と同様の検討を行うことでこの問題をより明確にすることができるだろう。

冒頭で説明しているように、パラノイアは対人的な性質の強い症状である。本研究では一般的な場面における曖昧さを扱ったが、実際には、パラノイアと関連を示すのは対人場面における曖昧さに限定される可能性がある。このことについては上述の問題も含めて検討が必要である。

また、本研究で測定しているのは曖昧さへの態度とパラノイアの2つのみであり、研究方法も関連研究であった。そのため、パラノイアの生じるダイナミックなメカニズムにまで踏み込むことができていない。本研究の知見を生かして、縦断的研究や実験的研究を行い、より詳細なメカニズムを明らかにすることが課題である。

## 引用文献

- Bentall, R.P., & Swarbrick, R. (2003). The best laid schemas of paranoid patients: Autonomy, sociotropy and need for closure. *Psychology and Psychotherapy: Theory, Research and Practice*, **76**, 163-171.
- Bebbington, P. E., McBride, O., Steel, C., Kuipers, E., Radovanovic, M., Brugha, T., Jenkins, R., Meltzer, H. I., & Freeman, D. (2013). The structure of paranoia in the general population. *British Journal of Psychiatry*, **202**, 419-427.
- Buchanan, A., Reed, A., Wessely, S., Garety, P., Taylor, P., Grubin, D., & Dunn, G. (1993). Acting on delusions(2): The phenomenological correlates of acting on delusions. *British Journal of Psychiatry*, **163**, 77-81.
- Budner, S. (1962). Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality*, **30**, 29-50.
- Fenigstein, A., & Venable, P. A. (1992). Paranoia and self-consciousness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 129-138.
- Freeman, D. (2006). Delusions in the nonclinical population. *Current Psychiatry Reports*, **8**, 191-204.
- 堀内 孝 (1995). 自己関連づけ効果の解釈をめぐる問題 名古屋大学教育学部紀要, **42**, 157-170.
- Huq, S., Garety, P., & Hemsley, D. (1988). Probabilistic judgements in deluded and non-deluded subjects. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, **40**, 801-812.
- Jaspers, K. (1913). *Allgemeine Psychopathologie*. Berlin: Springer. (西丸四方(訳) (1971). 精神病理学原論 みすず書房)
- 金子一史 (2000). 青年期心性としての自己関係づけ 教育心理学研究, **48**, 473-480.
- Kozak, M., & Foa, E. (1994). Obsessions, overvalued ideas, and delusions in obsessive compulsive disorder. *Behaviour Research and Therapy*, **32**, 343-353.
- Kruglanski, A.W. (1989). *Lay epistemics and human knowledge: Cognitive and motivational bases*. New York: Plenum.
- Kruglanski, A.W., Webster, D. M., & Klem, A. (1993). Motivated resistance and openness to persuasion in the presence or absence of prior information. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 861-876.
- Maher, B.A. (1974). Delusional thinking and perceptual disorder. *Journal of Individual Psychology*, **30**, 98-113.
- 西村佐彩子 (2007). 曖昧さへの態度の多次元構造の検討—曖昧性耐性との比較を通して— パーソナリティ研究, **15**, 183-194.
- Rogers, T. B., Kuiper, N. A., & Kirker, W. S. (1977). Self reference and the encoding of personal information. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 677-688.
- Salzman, L. (1968). *The Obsessive Personality: Origins, dynamics, and therapy*. New York: Jason Aronson. (成田善弘・笠原嘉(訳) (1985). 強迫パーソナリティ みすず書房)
- 豊田秀樹 (2002). 「討論: 共分散構造分析」の特集にあたって 行動計量学, **29**, 135-137.
- 津田恭充 (2009). 被害的な関係パラノイアの認知の生起メカニズムの検討—情報補完の視点から— カウンセリング研究, **42**, 22-29.
- 津田恭充 (2011a). 不確実な対人場面における情報収集スタイルと関係妄想的認知—反すうを媒介したメカニズム— カウンセリング研究, **44**, 101-109.
- 津田恭充 (2011b). 不確実な対人場面における他者の本心についての反すうと関係妄想的認知の関連—自尊心を統制した場合— カウンセリング研究, **44**, 10-18.
- Webster, D. M., & Kruglanski, A. W. (1994). Individual

differences in need for cognitive closure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 1049-1062.

Zimbardo, P. G., Andersen, S. M., & Kabat, L. G. (1981). Induced hearing deficit generates experimental paranoia. *Science*, **212**, 1529-1531.

### 註

- 1) 本研究は、科学研究費補助金(若手研究(B)、研究課題番号 25780432、研究課題 パラノイアにおける潜在・顕在的認知についての実証的研究、研究代表者 津田恭充)の助成を受けた。
- 2) 本研究は、日本グループ・ダイナミクス学会第 60 回大

会で発表された。

3) Jaspers(1913)以降、臨床群と非臨床群における妄想やパラノイアは質的に断絶しているという主張がなされてきたが、最近ではそれに対する反証も多くなされている (Bebbington, McBride, Steel, Kuipers, Radovanovic, Brugha, Jenkins, Meltzer, & Freeman, 2013; Freeman, 2006)。そこで、本研究も基本的にはこれと同様の立場を採用し、臨床群を対象とした研究の知見を非臨床群を対象とした本研究にも取り入れている。

## Attitudes toward ambiguity and paranoia

Hisamitsu TSUDA (*Faculty of Home Economics, Aichi Gakusen University*)

Previous researches suggest that intolerance of ambiguity is a predisposing factor for paranoia. Although both negative and positive attitudes toward ambiguity exist, negative attitudes have been the focus of previously featured studies. Therefore, it is time to clarify the relationship between paranoia and positive attitudes toward ambiguity. This study investigated 197 university students regarding what attitude might be a predisposing factor for paranoia. Paranoid self-reference (typically seen in youth) was used as a proxy measure for paranoia. Attitudes toward ambiguity were measured by 5 aspects: “enjoyment of ambiguity,” “reception of ambiguity,” “anxiety toward ambiguity,” “control of ambiguity,” and “exclusion of ambiguity.” The result of structural equation modeling indicated that anxiety toward ambiguous situations (i.e., “anxiety toward ambiguity”) and trying to control ambiguity by gathering information (“control of ambiguity”) were related to frequent or strong paranoia. This result supported previous researches claiming that negative attitude toward ambiguity is one of the predisposing factors for paranoia.

Keywords: delusion, ideas of reference, self-reference, attitudes towards ambiguity, intolerance of ambiguity.